

# あおもりいのちの電話

2020年 6月 54号



写真提供： 岩谷 和子

一娘ちよめへー とうさんは菊谷のおかあさんとつばきかあさん、志村のおじさんに会いたくなつたから、天国に行くよ。ちよめはちょっと寂しくなると思うけど、たくさんの方がおいらに会いに来てくれたように、きっと『ちよめちゃん！元気!!』と遠くからでもたずねてくれるから大丈夫だよ。

じゃあね……

ーちよめに会えて幸せだった わさおとうさんよりー

相談電話	0172-33-7830	(毎日 12:00~21:00)
いのちの電話ナビダイヤル	0570-783-556	(毎日 10:00~22:00)
県民フリーダイヤル	0120-063-556	(毎月 1日 12:00~21:00 1月のみ 15日)
自殺予防フリーダイヤル	0120-783-556	(毎月 10日 8:00~翌日 8:00)

# 過去という深い泉から

認定NPO法人あおもりいのちの電話理事長 石川 徹一

## －新型コロナウイルスの脅威に－

春は学校関係者にとって、本来ならもっとも喜びに満ちたときであるはずでした。しかしながら、今年は、新型コロナウイルス感染症の脅威が、わが青森県をも襲いました。卒業式、入学式の縮小に始まり、早々に感染対策のため、授業が中止に追い込まれました。授業が再開されても、生徒たちの声も行動も委縮して、本来の笑顔も元気のいい声も聞かれなくなり、かつてなかった雰囲気戸惑いました。何かしら得体のしれない恐れに感染しているかのようです。

1947年にアルバー・カミュは『ペスト』の中で、主人公にこう語らせています。「このいまましい病気め、かかっている連中まで心は感染している。」感染症はいつの時代にも確実に人々と社会の心を蝕んでいきます。そんな中だからこそ、生徒たちに伝えなければならないことがあることを感じています。

## －大きな収穫－

そんなことを考えている中で、全世界を襲ったこの出来事に対しての、それぞれのお国柄や、その国特有の行動様式、加えて各国の指導者の言動に接し、「やっぱりそうなんだ」と妙に納得している自分がいます。一方では経済が最優先され、そのみが人間の営みの中心に据えられることに危うさをおぼえます。他方では、改めて経済の多様な切り口にも触れる機会が与えられ、考えることが出来たのは大きな収穫でした。

世界史においても日本史においても、疫病の歴史はそれぞれの時代に大きな影響

を与えてきました。近年においても多発している現実があります。しかしまた、それを乗り越えての今日があることも事実です。

## －隠されたセルフイメージ－

グローバル化が叫ばれて久しい今日という時代と重ね合わせて気付いたことがあります。国家と世界を担っていると自負しているそれぞれの国の指導者たちの言動の背後に隠されたセルフ・イメージ（自己像）です。

これらの人々の言葉を聞きつつ、唐突にも思い浮んだ言葉がありました。「過去という泉は深い。その底は究めがたいほどと言えないだろうか？」という『ヨーゼフとその兄弟たち』（トーマス・マン）の冒頭の言葉です。

今回発せられた、日本を含め世界の指導者の言葉も、期せずして、自分の内に育てられた自己像を追体験しているもののように感じられました。過去という深い泉を内に持つ一人一人、そこに幽閉されている姿を垣間見る思いがしました。

## －過去という深い泉－

大切なことと向かい合っている「現在」という時間軸の中に姿を現すのは、「過去という深い泉」なのではないのだろうか。その時、自らの思考の中に現れてくる、悩みや繰り返される自問。やりきれなさの感情の反復、焦りが、列をなして付きまとう人々と自己の日々に気付きました。

それは、日常の出来事のみならず、あらゆる出会いの只中で、味わい続けているものでもあります。一人一人の生育、経験、

学習の中で、抱え込んできた「過去という泉」の存在に翻弄され、それが自己の物差しとなり、人格として形成されることになった自己と他者に突き当たりました。

相談を受けている自分が、誰よりも、「過去という深い泉」から脱出できずにもがいている中で、どうして信実な「傾聴」や「共感」「受容」…が出来るのだろうか？と自問する良き時となりました。「いのちの電話」が、この「過去という深い泉」という奈落から人々を解き放つために何が出来るのだろうか…？と。

#### －視点の転換を－

『ヨセフとその兄弟たち』は旧約聖書の『創世記』を締めくくる物語がモチーフになっています。12人兄弟の下から2番目で、年寄りっ子として、父の偏愛のもとに育ったヨセフが兄たちに憎まれ、エジプトに向かう隊商に奴隷として売り飛ばされ、様々な苦難を経て、ついにはエジプトの宰相になる物語です。ヨセフと再会して、復讐を恐れる兄たちに、「『恐れることはありません。わたしが神に代わることができましょうか。あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日このようにしてくださったのです』」と言い、兄たちを慰め、優しく語りかけた。」とあります。ここに見られるのは、「過去という深い泉」から解き放たれた視点の転換です。

自らも含め、悩める電話の向こうにいる人と共に、このような解放の経験、喜びをどのようにしたら味わうことが出来るのでしょうか。今日の「新型コロナ」への各国首脳の対応の多様性の中に、それぞれの「過去の深い泉」が背後にあったことは疑い得ないと思います。誰もが一生懸命、誰もが真剣であることを疑うわけでは決してありませんが。

#### －いのちの電話での出会い－

さて、わたしたちは、「いのちの電話」として、どのように電話をくださる方々と出会うことが求められているのでしょうか。どのように出会ったらいいのでしょうか。それは、「わたし自身」が、「過去という深い泉」から、水を汲む日常から解放されることにより始まることのように思います。

ドイツの哲学者、イマニュエル・カントは、人間の理性的関心の問いとして、「わたしは何を知ることができるか」「わたしは何をなすべきか」「わたしは何を希望することが許されているか」をあげています。

#### －共に希望する－

自分の、過去という深い泉からの理解という傲慢を知り、解き放たれ、それぞれが深い泉を内に持ちつつも、かけがえのない存在としての自分と他者と出会い、共に生きることを希望することができたら…！と私は思います。

希望することが許されている今、「こんな人がいたらいいな！こんな人に会いたいな」そんな出会いができるような存在になればと祈る日々です。

#### －新しい時代に生きる－

「あおもりのいのちの電話」が開局から25年、四半世紀、準備段階を入れると早くも27年の月日が経過しました。この間多くの方々のお励ましとお支えをいただきました。心から感謝申し上げます。

今一度、原点に帰りつつ、共に新しい時代に生きる者でありたいと願っています。

